

かくも「熱き」

特集

第85回 箱根駅伝

「ハコネ」の

「箱根駅伝を強くする会」

応援バス(09年1月2〜3日)同乗記

応援者たち

6連覇の偉業に、79回の最多連続出場―。

「箱根駅伝」で中央大学は、秀でた伝統と実績を誇る。

それを支えてきているのは、“熱き”「ハコネ」の応援者たちだ。

なかでも「中央大学箱根駅伝を強くする会」には熱烈ファンが集う。

正月2、3両日、学生記者取材班は「強くする会」の応援バスに同乗し、会員らを密着取材。

同時に往・復路で「C」マークの入った小旗を振る応援者から、熱き思いを聞いた。

箱根路は、「ちゅうおう」の熱きコール・リレーで燃え上がっていた―。

学生記者取材班

〈1月2日、

大手町・往路スタート地点〉

1月2日午前6時半。学生記者取材班は東京・大手町の産経新聞社前の広場に集合した。集まったのは山崎、上田、武田、篠田、石川の5人。辺りはまだ暗い。声を掛け合って、お互いを確認し、「明けましておめでとう」と新年のあいさつ。

早速、中央大学の応援場所の大手町センタービル前に向かう。今年抽選で読売新聞社前のスタート地点からは目と鼻の先の絶好の場所を得た。すでに応援部リーダーとチャリディング、ブラスコーアの団員が応援態勢を整えていた。

「中央大学箱根駅伝を強くする会」(熊谷秀男会長、以下、強くする会)の人たちもすでに集まり、幟(のぼり)の準備に忙しい。「強くする会」には、2、3両日、お世話になる。学生記者4人は、中大応援団とともに2日間、同じように移動し、各応援場所と同じ時間を過ごす。午前7時。スタート1時間前。一斉に各大学の応援がはじまった。いつの間にか夜が明けていた。中大の応援場所には、早くも人だかりがで

きてきた。

楯山親方(元玉春日関)

も応援に

校歌を唱和しながら中大応援団Ⅱ写真左Ⅱを見守っていたのは、石田政史さん(昭和54年経済卒)。中央大学ビジネススクールの社会人学生だ。毎年、スタートを大手町で見送った後、マイカーで鶴見中継所まで移動して応援、そのあとは自宅までテレ



ビ観戦しているという。

「強くする会」会員でもある石田さんは、「中大はしばらく優勝していない。そろそろ優勝して、中大を盛り上げてほしい」と熱望。ただ、「今年は最もシード落ちの危険が高い年」と危機感をあらわした。

目を転じると、中大相撲部出身の大相撲元関脇・玉春日の楯山親方Ⅱ写真Ⅱを見つけた。髷(まげ)に着



物姿が人目を引く。

昨年の9月場所に現役を引退した楯山親方は、「箱根駅伝の応援に来るのは初めて」という。「母校の応援に来るのは当たり前」と親方は、「相撲のパワーを駅伝に託したい」と後輩たちにエールを送った。

午前7時40分。取材班はスタート地点近くで、足早にどこかへ向かう

駅伝部主務の遠山翔太さん(文

4)を見つけ、あとを追った。

話しかけると、1区が山本庸平選手(経済3)にエントリー変更になったことを教えてくれた。しかし、山本選手の体調がすぐれないらしい。更に齋藤勇人選手(商2)、梁瀬峰史選手(法3)も体調が悪いと知らされた。

「10区にエントリーしている棟方雄己選手(法1)も10日前にインフルエンザにかかり、今回は出場できなそうです」と遠山主務。

学生記者は、やはり体調不良者が出た昨年を思い出した。昨年、体調を崩しながらも好成績で3区を走り切った上野雄一郎さん(平成20年法卒)は、今年日本テレビのスタジオからゲストとして応援している。

「応援すると元気がでる」と

久野理事長

中大の応援場所には大学関係者も多く駆けつけていた。記者(石川)は、その中から久野修慈理事長Ⅱ写真右下Ⅱに話を聞くことができた。



久野理事長は、「応援することで、気持ちがるくなり元気になるのが駅伝の良いところ。OBも駅伝を応援することで母校での青春時代を思い出し、懐かしむことができる」と話され、ひとつエピソードを紹介してくださった。

以前、理事長が箱根駅伝のスタートを大手町まで見に来た時、悲しそうに見える中大OBを見つけた。話を聞くと、仕事がうまくいかず絶望している、という。でも、駅伝を応援して元気をもらい、「また頑張る!」と言って明るく帰って行ったそう。

久野理事長は、「人々に元気を与える駅伝やスポーツの力を、社会はもっと理解するべきだ」と説いたうえで、中大スポーツが一層盛り上がり

ることを期待された。

【1区東京〜鶴見】

午前8時。号砲が鳴り、第85回箱根駅伝がスタートした。

すぐに、中大の応援場所に1区走者の集団が現れ、あつという間に走り抜けた。中央大学ののぼりを持って立ち並んだ「強くする会」のメンバーはじめ、応援に駆けつけた人たちから「庸平、頑張れ〜！」のコールが飛ぶ。

山本選手が見えなくなるまで声援を送り続けたあと、「強くする会」のメンバーは、のぼりをたたみ、往路ゴール地点の箱根・芦ノ湖に向かうバスへ。学生記者4人も「2日間お世話になります」と挨拶し、バスに乗り込んだ。

―バス車内―

午前8時20分。「強くする会」がチャーターしたバスが、大手町から芦ノ湖へ向かって発車した。昔は、選手を追っかけることができたが、今は道路事情のため無理で、先回りすることになる。少し経つと、ビールやジュース、お菓子が配られた。そして中大の優勝を祈願して、みん

なで「乾杯〜」。

「強くする会」

創立は1988年

「強くする会」事務局長の三船巧

さん（昭和左38年法卒）Ⅱ写真左Ⅱが、「あけましておめでと〜うございませう」。



今日、明日の2日間、よろしくお願ひします」と挨拶。続いて「強くする会」副会長の上岡君義さん（昭和29年法卒）Ⅱ写真左Ⅱが、「正月の3が日、早朝よりご乗車いただきいて



ありがとうございます。私どもの思いがしっかり選手に届くことを願っております」と2日間わたる往復路のレース展開に思いをほせながら、挨拶された。

この日、参加したのは「強くする会」のメンバーら19人、それに学生記者らを入れた計24人。早速、三船事務局長が「山本は、去年は区間5位で2区につないだ選手です。1区は、鶴見中継所まであと3キロの地点で余力ある選手とない選手に差がつく。山本はやってくれるでしょう」と解説。

バスに乗った「強くする会」のメンバーらは、顔見知りもいれば初対面の人もいる。願ひは、「中大優勝」のひとつだ。誰もがビールやお菓子を片手に、車内に設置された2台のテレビ中継を見守った。

その中の一人、学生会千葉県支部支部長の吉田卓さんは、「強くする会」の創立に関わった。「昭和27年から欠席なしで毎年応援に来ていますよ」という。

吉田さんは、中大出身の経済人が集まる『南甲倶楽部』を中心に、「強くする会」創立に向け奔走。当

時、さごう会長であった水島廣雄さん（現「強くする会」名誉会長）の理解を得ることができ、1988年11月に「強くする会」ができた。昨年で20周年を迎えた。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

1区20キロ付近。早稲田がトップで先頭集団を抜け出す。中大の山本選手は2位集団に見当たらない。「中央、遅れてるな...」。バス車内にちよつと気落ちした声がかかる。山本は13位で2区の徳地悠一選手（法4）にたすきをつないだ。

【2区鶴見〜戸塚】

―バス車内―

「強くても弱くても
応援する」

バス車内に「トクチー！」の大きな声が飛ぶ。「2区徳地は、卒業後は法科大学院に進むことが決まり、今年で陸上を卒業。彼にとつて最後の大会です」と三船事務局長。

三船さんの箱根駅伝に対する思いは人一倍強い。「強くする会」創立以来、ずっと応援し続け、財務委員を経て、4年前から事務局長を務め

ている。「強いときに応援する人は多いけど、私たちは弱い時でも応援する。強くても弱くても応援する」と熱い気持ちは一貫して変わらない。「箱根へ応援に行くのは、毎年20人から30人。正月の2日、3日だからなかなか行く人が集まらない」とちよっぴり残念そうに話してくれた。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

13位でたすきを受けた徳地選手が5位集団に。バス車内に拍手が湧いた。「上がっているな。よしっ、徳地」「徳地は、今日は調子がいいよ」―バス車内の氣勢が上がってきた。

―横浜の沿道―

横浜駅周辺では、午前8時ごろから各大学の場所取りが始まっていた。それぞれが各大学発行のスポーツ紙を読んだり、ラジオを聴いたりしていまかいまかと選手が通り過ぎるのを待っていた。

記者(野村)は、赤字の「C」のマークの小旗をもった一杉信夫さん(昭和59年経済卒) Ⅱ写真Ⅱに話を聞いた。「今年で沿道での応援は15回目。合唱部だったため、強くする会に校歌を歌って欲しいと頼まれて、応援に来たのがきっかけで、正月恒



例になった」という。この日の服装は、中大のニット帽に駅伝のジャンパーという応援スタイル。「今年は総合力でたたかかって、最低でもシード権はとって欲しいです」と小旗を打ち振った。

【3区戸塚〜平塚】

―バス車内―

徳地選手は5位で3区の森誠則選手(法4)につないだ。区間5位の好成绩だ。車内に拍手が湧き「トクチ、ありがとう〜!」の声があがる。次いで、「モリ、頑張れよ!」。森選手に期待がつけられた。

北海道合宿に

果物の差し入れ

車内のテレビ中継を見ながら、話

を聞かせてくれたのは、今回初めて参加したという源嶋智さん(昭和41年文卒)。「強くする会」の存在は今まで知らなかったが、知り合いの会員から電話で誘いを受け、参加したという。

青果市場で仕事をしている源嶋さんは、北海道合宿へリンゴやバナナなどを差し入れたこともある。源嶋さんは「北海道合宿へは仕事の都合で行くことができないので、その分、ハコネを精一杯応援したい」と力を込めた。

―平塚中継所―

午前9時、記者(橋本)は平塚中継所に到着。中継所の通過予定時刻は午前11時で、まだそんなに人は多くない。巨大モニターが設置された沿道脇の駐車場は選手の待機場所にもなっていて、準備運動を終えた4区の梁瀬峰史選手(法3)に意気込みを聞くことができた。「徳さんが頑張ってくれたので、それを5区につなぎたい。頑張ります」と笑顔で応じてくれた。

10時、沿道の人が増え、モニターの前にも多くの観客が集まってきた。沿道の一番前で中大の小旗を持って

いたのは、小木曾清子さん。息子の慶介さんが中大商学部卒業生だ。

3年前に箱根湯本で初めて応援した時、「中大卒業生の70、80歳の方たちが元氣よく中大を応援していて、その熱意に感動してから駅伝の応援にはまってしまう」と小木曾さん。持っていた中大の小旗は、3年前に中大OBに譲ってもらったものとか。「布でできているから丈夫なの。でも、今はもう造ってないみたい」と話してくれた。

【4区平塚〜小田原】

午前11時19分、3区の森選手は、4区の梁瀬選手にトップとは3分差の6位でたすきを渡した。

―バス車内―

三船事務局長が「4区の梁瀬はスピードのある選手です。4区は短いけれど、つなぎの区間ではなく、ここで差がつく重要な区間です」と解説。「梁瀬が頑張れば、3位になれるね」と期待の声があがる。

バス車内のテレビの映りが悪くなってきた。午前11時30分すぎ、ラジオからは「中央大学が遅れていきます」との情報が伝わってきた。「な

んで遅れるんだよ」「梁瀬は体調が良くないようだ」などと車内に不安が広がってきた。中大は10位に後退した。

ラジオの情報を気にしながら、「私たちが学生だったころは6連覇した。優勝して当たり前だった」と話出したのは、副幹事長の前島一夫さん（昭和35年経済卒）。前島さんも、「強くする会」創立以来、応援を続けている。「昔は、小旗を応援してくれる人の家まで届けに行ったり、当日は中継所に応援の小旗を届けたりもしましたもんです」と振り返った。

【5区小田原〜芦ノ湖】

―バス車内―

テレビ映り悪く、

携帯電話で情報を

4区の梁瀬選手は結局、順位を6つ落とし、12位で5区の大石港与選手（法2）にたすきをつないだ。

箱根路に入り、バス車内のテレビは映らなくなった。ラジオも聞こえにくい。

「大石は大丈夫か」「シート権が心配になってきたな」。車内からは

気をもむ声が漏れはじめた。写真左。そんな車内で、清水康弘さん（昭和38年経済卒）の携帯電話には、頻繁に連絡が入ってくる。清水さんは、その情報を全員に伝える。清水さんは「強くする会」のムードメーカーのような存在だ。



「箱根に泊まって応援したくても、正月はホテルがとれない。それで泊まりがけで応援する強くなる会に入った」という。毎年、合宿地や全日本大学駅伝の応援にも出かける。駅伝に関する資料も大量に収集している。『硬式野球部を優勝させる会』

にも入っていて、神宮球場にも足を運ぶ。熱烈な中大スपोर्टス応援団だ。清水さんは、「テレビを見て、応援する人もいるけど、こうして強くする会のみなさんと一緒に応援すると、一体感が何とも言えない」と明るく語ってくれた。

★ ☆ ★ ☆

12時。バスが芦ノ湖に到着した。箱根の山で道路渋滞にあい、予定よりかなり到着が遅れた。選手たちの到着予定時刻まで、1時間半ほどあるが、昼食は後回しにして、早速、中大の応援場所準備にとりかかった。芦ノ湖の応援場所もゴール近くの絶好の位置だ。

〈芦ノ湖・往路ゴール地点〉

芦ノ湖には

多数の応援者が

芦ノ湖には、多くの人が応援に駆けつけていた。「毎年応援に来てい」と話すのは、望月大輔さん（平成19年法卒）。体育連盟の常任委員をやっていた関係で在学中から、駅伝は見えていたという。「箱根の」山は何があるか分からない。楽しみに待っています」と語り、応援へと向

かった。

「箱根駅伝が好きで父の選歴祝いで、初めて応援に来た」というのは丹羽睦美さん（平成12年経済卒）。「昔のように強い中大が見たいです」と笑顔で答えてくれた。また、関根豊高さん（平成9年法卒）は、「最近弱いから、応援に行かなければと思っ来て来た」と話す。「早稲田には負けないように頑張ってほしい」とライバル校をあげた。

家族5人で応援に来ていたのは、久松隆幸さん（昭和60年経済卒）写真左。昨年に続いて2度目の「ハ



コネ」という。新井マリさん（昭和56年商卒）は、「たまたま正月旅行

で箱根に来たので、息子が入学する
中大の応援に来ました。応援の人が
こんなにいっぱいいるとは思わな
かった」と驚いた様子。「今年はシー
ド権を落とすんじゃないかと心配で
す」と5区の大石選手の走りを気に
かけた。

★ ☆ ★ ☆

「応援に生きがい」

と長内了教授

中大の応援場所に長内了・法科大
学院教授（常任理事）の姿があった。
長内先生は応援部部长で、バスで移
動する応援団を引率し、2日間、行
動を共にしている。

長内先生は、昭和56年に応援部部
長に就任し、30年間応援部とともに
箱根駅伝を見守ってきた。駅伝は「走
る選手がスター」で、そんな選手の
応援に「生きがいを感じている」と
話す。初めて箱根へ応援に行ったと
き、その魅力にすっかりはまってし
まった、そうだ。

長内先生は「かごに乗る人 担ぐ
人 そのまたわらじを作る人」とい
う格言を教えて下さった。「スポー
ツだけでなく学業においても様々な

所に様々なエースがいる。しかし、
エースだけではなく、エースを支え
応援する人が必ず存在する」と説明
された。

「応援団もまた応援されている」
という。それが、「強くする会」の
会員や、在学生たちの存在なのだ
そうだ。「応援団だった最近の卒業
生は勿論、何代も前の卒業生も家族
を連れて箱根にやってくる。駅伝は、
選手はもちろん、応援団や応援に駆
けつけた卒業生たちも歴史の一部を
感じることができるとです」。

毎年箱根に来る

元応援団長

長内先生が話してくださったよう
に、平成6年度に応援団団長を務め
た伊藤貴淑さん（平成7年文卒）が
いた。「箱根駅伝は応援団にとって
引退前最後の舞台で、4年間の集大
成を披露する場です」と卒業後も毎
年欠かさず、後輩たちに会いに大手
町と芦ノ湖へ足を運んでいる、とい
う。

応援団に入ったのは、「男として
カッコいいと思ったから」と伊藤さ
ん。「同じ大学の仲間が頑張ってい

る姿を見て、それを応援することで、
自分たちも同じ時間を共有すること
ができる」と強調。「自分たちの応
援で、選手たちが普段以上の力を出
してくれば最高です」と声に力を
込めた。

「選手がくじけそうになっっている
時こそ声をかけるのが応援団の仕事
です」と話すのは榊葉隆雄さん〓写
真。20年前の応援団団長だ。「私が大



学1、2年生の頃、中大は予選落ち
してしまっただけです。でも、4年の
時に予選から這い上がって6位入賞
を果たしました。応援団としての喜
びを得た瞬間でした」と振り返る。
一方で、「中大は、父母のパワー

が強いのに、現役学生のパワーが少
ない。中大が伸びないのはそこに原
因があると思うんです」と不満を口

にした。

応援団チア部員の一人、井沢遙さ
ん（文3）の家族が応援に来ていた。
箱根まで足を運んだのは、初めてと
いう。「テレビで見ると、ナマで
見る箱根駅伝は雰囲気も迫力も違う。
応援も大変盛り上がる」と遙さんの
応援ぶりを見ながら、「ハコネ」を
楽しんでた。

「ハコネが同窓会」と

仲良し3人組

進藤晶子さん（平成17年文卒）、
本間理紗さん（同年法卒）、根岸彩
果さん（同年法卒）の仲良し3人組
をみつけた。3人は学生時代、応援
団で活躍。卒業してからも毎年、応
援しており、「箱根駅伝の応援が同
窓会のようになっている」と話す。

「『強くする会』のみなさんには大
変支えていただき、本当にお世話に
なりました」と3人は口をそろえた。

★ ☆ ★ ☆

1時間前から各校の応援合戦がは
じまっている。中大応援団もリー
ダー部員が太鼓を打ち鳴らし、声
からす。全身を使った力感あふれる
応援に、周囲から拍手がおくられる。

チア部員もほとんど休みなしに踊り続けている。ブラスの音頭で「チカラ、チカラ、中央、中央」と応援歌が何回も何回も繰り返される。「強くする会」の人たちは、のぼりを持ってもう1時間以上も立ち続けている。

午後1時30分すぎ、トップの東洋が、中大応援団の前を走り抜けた。20秒ほど遅れて2位の早稲田。続いて3位日体大、4位中央学院、5位山梨学院…。トップが通つてから、すでに4分が過ぎていく。まだ、中大が来る気配はない。

さらに2分ほど過ぎた後、大石選手が駆け抜けた。「オオイシ、よく頑張った」の声援が飛ぶ。中大のゴール順位は11位。トップ東洋とのタイム差は6分28秒だった。

― 往路報告会 ―

箱根駅伝記念碑前での報告会に、「強くする会」のメンバーは、応援場所からのぼりを持って移動。11位の順位に、表情は心なしか沈みがちだ。

往路11位、

復路で巻き返しを

浦田春生監督が、箱根まで応援に



駆けつけたOBやOG、大学関係者を前に挨拶し、明日の復路での巻き返しを誓う。周囲からは「明日、頑張れ」、「明日、明日」、「明日がある」と励ましの声飛び交った。

大学を代表して挨拶した長内先生が、「1つでも2つでも3つでも順位を上げてください。優勝を狙って、力を明日にぶつけてください」と監督、選手らに対し復路での巻き返しを鼓舞した。

報告会のあと、応援団リーダー部の瀬川裕也さん(法4)、江口幸太さん(法4)、福山倫広さん(法4)の3人〓写真左〓に話を聞いた。

「私たちには一つ上の先輩がいなかったで、去年も一番上として活動してきましたが、今年は最後のハコネ。しっかり選手を励まします」と瀬川さん。大会前に徳地選手と話をしたという瀬川さんは、「徳地は『厳しい戦いになる』と言っていました。しかし、彼はあくまでも『優勝を狙う』と言っていたので、私たちも追い風となつて応援したいです」と力強く宣言。

江口さんは、「このハコネで、この学ランとも卒業だと思うと、さみしいです」と4年間ずっと着続けたが学生服の袖をそつとなでた。「『3バカトリオ』って言われているんですよ」と笑う3人は、見た目はコワイが話すと柔和で優しい。中大の復路での巻き返しを願つて、あと1日、応援に全身全霊を打ち込む。

〈2日夜、宿泊先ホテル〉

応援に駆けつけた

弟子屈町長ら

中央大学の駅伝チームは、毎年夏北海道川上郡弟子屈町で合宿している。その弟子屈町から徳永哲雄町長、町議会の八幡豊行議長、町教育委員

会の山口武司社会教育課長、町商工会の大道賞二事務局長の4人が、初めて応援に駆けつけ、2日夜、宿泊先の芦ノ湖近くのホテルで強くする会会員らと懇親を深めた〓写真左。



「強くする会」の一団と学生記者も同じホテルで、このホテルには6、

7の他大学応援団も同宿していた。

「現場に立ち会って、ドラマを見ているようでした。ハコネを肌で感じる事ができて良かった」と徳永町長はハコネの興奮を語る。今回、箱根まで応援に来ることになったのは、平成19年夏に弟子屈町を訪ねた「強くする会」のメンバーに約束したからだ。

中大は当初は北海道・別海町で合宿していたが、弟子屈町との関係は平成8年の女子陸上部の合宿が先駆けとなった。弟子屈町での合宿を誘ったのは、商工会の大道さん。町おこしとして弟子屈町へのスポーツ合宿誘致を考えていた大道さんは、別海町を視察。その結果、別海町は練習設備は整っているが、合宿施設の環境はとて面白いとは言えない状況であることを知った。

箱根に似た地形で

夏の合宿地に

そこで大道さんは、「一度、弟子屈町に見学に来て、合宿地として検討してほしい」と当時の陸上競技部監督であった木下澄雄さん（現、125周年事務局副部長）に提案した。

アップダウンの多い弟子屈町の地形は、箱根の山に似ている。温泉も出る。練習、生活環境とも申し分ない。木下監督からは、見学後即OKが出たのである。

弟子屈町で合宿する大学は中大が初めてだった。その後、多くの大学が合宿地として弟子屈町を利用するようになり、多い時で一月に3000人が来るほどになった。ただ現在は、中大と城西大学の2校。「多くの大学が環境の変化を求めて、短期間で合宿地を変えていきます。その中で、毎年来てくれる中大の存在はありがたい」と徳永町長は話す。

弟子屈町では、合宿に来た学生たちに毎日の昼ご飯代として金券（1日1人800円）を配布。さらに中大には、交通費の一部を出している。スポーツ合宿の誘致に町予算を割いているのだ。

「お金がかかるため、新たにロードコースを増やすことができず、中大さんには申し訳ない。だからせめて応援には行かないと申し訳ない」と徳永町長。「弟子屈の田舎道を走っている姿を見ていると、箱根を走る姿を見たくなくなってしまふ」と4人は

口をそろえた。「強くする会」会員とも親しくなり、「会えば会うほど仲良くなるし、また会いたいと思っってしまうんですよ」と徳永町長は明るく笑った。

1月3日、

芦ノ湖・復路スタート地点

午前5時55分、まだ暗い中、バスが芦ノ湖へ向けてホテルを出発。6時6分に応援場所に到着した。応援団はすでに着いていて、スタート1時間前の7時に応援を始められるよう準備をしていた。

学生記者も「強くする会」の人たちと一緒に、バス内でホテルが朝食に用意してくれた弁当をいただく。カップの味噌汁のお湯は、例年近くのお土産店にお願いしてポットに入れてもらっているという。冷えた身体に温かいものがあるがたい。

「シード権とる」と

副主務が挨拶に

午前6時40分頃、駅伝副主務の井上洋平さん（商2）がバスの中に挨拶に来た。「今日は絶対シード権を確保します。復路はチーム全員の力で巻き返せるように頑張るので応援

よろしくお願いします」という井上さんに、大きな拍手がおこる。「同時に頑張れよ」の声。

朝食をとると、「強くする会」の人たちはのぼりをたてにバスの外に出る。外では、井上さんと応援団リーダーの福山さんが声を掛け合っていた。写真。



「この寒い中応援してくれてありがたい」と井上さん。「シード圏内に入ってくれるって言ってくれたので、全力で応援します」と福山さんそして二人は、「お互い頑張ろう」と手を握った。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

午前7時までエントリーマンパー変更を受け付けている。スタート地点では、各大学のマネージャーがエ

ントリー変更者を互いに教えあつて
いる姿が見られた。中大は、7区は
山本武史選手に、10区は斎藤勇人選
手にエントリー変更した。

スタート地点近くで中大の帽子を
被っている人に声をかけた。見城邦
男さん(昭和37年経済卒) 写真 〓は、
「15年近く、毎年応援に来てい



という熱烈な駅伝ファンだ。今年も
また、静岡県の中央大学OBやその
家族50人ほどで、バスを仕立てて応
援に来たという。

「復路のスタートを応援した後、
ゴルフ場のレストランでみんなでご
飯を食べるのが恒例なんです。私
はマージャンと酒ばかりの学生でし

たが、卒業してからはハコネを応援
するようになりました」

寒さ吹き飛ばす

中大応援団

午前7時、各校応援団が応援を開
始。満を持していた中大応援団は、
寒さを吹き飛ばすかのようにエネ
ルギーを爆発させた。

沿道はすごい人垣だ。中大の応援
場所はバスターミナル内なので、後
背は空いているが、二重三重もの人
垣に、背伸びしたり、人の隙間から
でないとながみえない。「強くする
会」の人たちもしつかり持ち場を確
保し、じつとスタートを待っている。
午前8時、復路スタート。同時に、
打ち上げ花火の音が芦ノ湖畔に響き
渡る。人垣ができた沿道からは、「頑
張れ〜」の大歓声があがる。

中大の6区は山下隆盛選手(法2)。
復路で巻き返すべく、11番目で芦ノ
湖をスタートした。山下選手は、「ヤ
マシタ」の大声援を受けて、中大の
応援場所をあとという間に走り抜け
た。

復路のスタートを見届けると、「強
くする会」のメンバーは、早々にの

ぼりを片付けてバスに乗り込み、東
京へ向かった。応援に来た中央大学
静岡県支部の人たちが、バスに手を
振る。バス車内からも「強くする会」
の人たちが、手を振って返し、復路
での中大の健闘を誓い合った。

【6区 芦ノ湖〜小田原】

―バス車内―

箱根の山では、テレビの映りが相
変わらず悪い。ラジオが情報源だが、
選手たちの様子が見えないため、気
がもめる。

そんな中、9時前、「山下10位」
の情報。順位をひとつ上げ、車内か
ら拍手。でもシード権ぎりぎりだ。

「学生ももつと

応援に来て！」

バスの後部座席に、中大OGでは
ないが、毎年参加しているという女
性がいた。須藤菊乃さんで、中央大
学南甲倶楽部の事務室に勤務されて
いる。

「事務室員になってから6、7年、
毎年応援に参加しています。強くす
る会会員のほとんどが南甲倶楽部の
会員さんなんです。みなさんが一

生懸命応援しているから、のほほん
としていられなくて」と明るく笑っ
た。「中大の校歌は覚えちゃいまし
たよ」という須藤さんは、「もう少
し中大の現役の学生さんが応援に参
加してくれないかなと思います。他
校は学生さんの応援が多いです」と

中大在校生の奮起を促した。

山下選手が、10位で7区の
山本武史選手(経4)にたすきを渡
した。車内から「よしっ！」という
声ももれる。

【7区 小田原〜平塚】

―バス車内―

12キロを過ぎ、中大は9位集団で
日大、関東学連選抜のシード権争い
となっている。12位の国士館、東農
大も追ってくる。

17年間、大阪から

応援に参加

気が気でないレース展開が続く中、
心配顔で情報に耳を傾けていたのは、
佐々木伎予子さん 〓写真次頁。中大
卒業生ではないが、「強くする会」
会員で、「6連覇のころをテレビで
見てから、ずっと中大の駅伝ファン。



から楽しんでる。

【8区平塚〜戸塚】

―バス車内―

ほとんど団子状態のまま、山本選手が11位で8区の小柳俊介選手(商1)にたすきをつないだ。シード権争いが続く。「よしっ、頑張れ!」。

声援に力が入る。

小柳選手が8位にからむ。「頑張っているね」と拍手がおこり、「さあ行け」「小柳行け」と掛け声が一袋と大きくなった。

★ ☆ ★ ☆

物心両面支援する「強くする会」

課題は若い人、女性の新規会員増

テレビ中継に目をやりながら、「強くする会」副会長の上岡さんに会の運営などについて聞いた。強くする会は、箱根駅伝の応援はじめ、年3回の合宿訪問(菅平、千葉、弟子屈)や記録会への参加、ハーフマラソンやインカレの応援などを通して、駅伝チームを物心両面から支援している。

合宿訪問では、「練習する選手を激励してから、一緒に昼食をとって

交流します。そして陣中見舞いをキャプテンに渡します。選手との交流が会員の楽しみになっています」。しかし、箱根や合宿に来る会員は、主に役員の方々に固定してしまっていて、「会員に若い人、女性が少ないのが悩みです」と上岡さん。

現在の会員数は約1100名で、年会費は5000円。会費を納めているのは会員の7割で、「中央大学」と染めたのぼりの作成や各支部への応援のお願いなどを含めた運営費は、会費だけでは足りず、寄付や奨学金に対する援助金で補っているのが現状だ。

「箱根駅伝を広め、この会を連続性のある会にするためにも会員を増やすこと」を課題にあげる。強くする会主催で毎年4月上旬と12月上旬に上野の精養軒で行っている選手への激励会には、会員以外にも参加を呼び掛けており、昨年12月の激励会には100名前後の参加があった。

上岡さんは任意団体をまとめていく立場として「感謝の念を失わないこと」を自身に言い聞かせているという。「会社でも団体でも支えてくださる役員、会員の方がいらっ

しやって初めてその会が動き出す」と強調。「強くする会も大きな行事を行うたびに、役員、会員の方が何回も集まって準備してくださっています。だから今日を迎えられるんです。本当に感謝しています」と語られた。

【9区戸塚〜鶴見】

―バス車内―

小柳選手は、結局8位で9区の平川信彦選手(総4)にたすきをつないだ。順位を3つ上げ、健闘。「平川は中大のエース。10区の斎藤が余裕をもって走れるように、きつと順位をあげてくれる」と三船事務局長。

―ひと足早く昼食―

テレビ見て、

シード権に不安も

午前11時すぎ、「強くする会」のバスは早めの昼食をとるため上野精養軒へ。精養軒の永岡公社長は中大OB(昭和41年卒)で、「新入生歓迎会などでも便宜を図ってくださり、なにかと利用させていただいている」と強くする会の中村重郎幹事長(昭和34年卒)。「強くする会」の事務局(電話03-5624-000

毎年、大阪から参加していて、今年で17年目」という。
中大の6連覇は、第35回の昭和34年から第40回の昭和39年までで、佐々木さんの中大のファン歴は長い。毎年、大阪から元旦の夜10時に大阪を夜行バスで出発し、翌朝6時に新宿に到着。7時に大手町に着き、8時のスタートを見てから箱根へ行く。これを15年も繰り返し返してきた。

最近2年間は、1月2日の朝5時半に家を出て、新幹線で熱海へ。そこから妹さんの車で箱根へ向かう。わざわざ遠くから足を運ぶ訳は、「やっぱり雰囲気。応援団のあの音とか。それに応援で知り合ったみなさんに会えますしね」という。「自宅に帰ったら、録画しておいたビデオを2日間かけて見ます。何回も巻き戻して、見直して」とハコネを根っ

20)は、中村幹事長が社長をして
いる会社内に置かれている。

テレビ中継を見ながら昼食。話題
はシード権入りできるかどうかに集
中する。横浜駅前で平川選手が7位
と、ひとつ順位をあげた。シード権
を死守する見通しが出てきたが、ま
だもちろん安心できない。

昼食を終え、「強くする会」のバ
スは、往路、ゴールの大手町へ向かった。

【10区鶴見〜大手町】

平川選手は鶴見中継所を東農大と
同着の7位で、10区の齋藤勇人選手
(商2)にたすきをつないだ。

―大手町・復路ゴール地点―

上野で一足早く昼食を済ませた
「強くする会」のバスは、12時すぎ
大手町に着いた。中大の応援場所は、
読売新聞社前のゴールテープが直線
で見通せる絶好の位置だ。

すでに、すごい人ごみだ。選手到
着まで、まだ1時間半はあるという
のに、早くも沿道に座りこんでいる
人がある。「強くする会」の人たちは、
のぼりをたてて沿道に立ち、場所を
確保する。

みるみるうちに沿道には、十重二

重の人垣ができてきた。芦ノ湖の人
出もすごかったが、大手町はさらに
すごい。

「来年はハコネ応援」と

チア部員

中大関係者も大勢駆けつけていた。
荻原慎太郎さん(平成13年卒)、大
場聡子さん(平成14年卒)、福西美
佳さん(平成15年卒) 写真左は、
英米法研究会の先輩、後輩だ。



「駅伝は初めて来ました。最近、
みんなで会ってなくて、たまたまお
正月に集まったので」と大場さん。

箱根駅伝は、「集まるきっかけですね。

来年も出場できるなら、応援に来た
い」とシード権を確保できるかどう
か心配そうに話してくれた。

チア部の先輩の応援ぶりを見に来
ていた部員がいた。田村夏帆さん、
(文2)、杉山陽子さん(総2)、高
島千華さん(商2)、藤田佳那さん
(文1)、土田久恵さん(法1)の
5人組 写真左は、チア部員は、3、



4年生にならないと箱根駅伝の応援
には出られない。初めて見た駅伝の
応援に、「盛り上がりが違う。団長
はいつもと違う」と口をそろえた。

★ ☆ ★ ☆

蒲田を過ぎ、齋藤選手は東農大、

山梨学院と7位集団。田町で、日大
が加わり、4校がシード権を争う熾
烈な競争が続く。「シード権入りは、
なんとか大丈夫そう?」「いや、こ
のままだと危ないかもしれない」。

めまぐるしく順位が入れ替わる
展開に、「強くする会」会員はじめ、
中大の応援場所に集まった人たちは
気がでない。もう周りは、身動き
ができないほどの人で埋まった。

トップの東洋がゴールしてからは
ぼ9分後、齋藤選手がゴールした。
9区から順位を3つ下げたものの、
なんとか10位でシード権最後の席を
確保できた。

★ ☆ ★ ☆

ゴールを見届けた「強くする会」
の源嶋さんは、「今回は本当に冷や
冷やさせられた。直接、現場で見
いたから余計に冷や冷やした」と
シード権確保にひと安心しながらも
「シード権を取るぐらいは当たり前
であってほしい」と笑った。

―選手を称える会―

総合10位。

「来年は夢を」と永井学長

大手町のゴールを見届けると、「強



くする会」のメンバーは、近くにある日本橋・常盤橋公園へ向かった。そこで、午後2時15分から「選手を称える会」Ⅱ写真左ⅡがOB・OGに大学関係者、沿道で声援を送った人たちが集まって、行われた。

永井和之総長・学長は、「みなさんの力がシード権の獲得につながりました。来年は夢を叶えられるよう、

ぜひ頑張ってください。ありがとうございます」と挨拶。

久野修慈理事長は、「1位に値すると思います。ベストを尽くしてくれましたと思っている。走らなかつた選手や、応援団、チア、ブラスのみなさん、ありがとうございます。多くのOB、関係者、父母の方々がたくさん駆けつけてくださいました。選手に拍手をよろしくおねがいします」と選手をねぎらった。

浦田春生監督は、「たかさんの応援ありがとうございます。10位は決している結果ではないが、4年生中心で頑張ってくれました。来年は上位に食い込み、優勝を狙いたい」と来年の捲土重来を期した。

陸上競技部OB会

今回はバスで、「中央大学陸上競技部OB会」主催の慰労会Ⅱ写真下Ⅱが行われるパレスホテルへ。この席で井上彰・陸上競技部部長（法学部長）は、「皆様方の支援で、なんとかシード権を確保できました。しかし、不本意な結果です。来年は強い1年生が入って来ます。全力を尽くしてまいります」と述べ、来年の奮闘を約した。



「自分に自信もって」と奮起促す

このあと、「強くする会」を代表して上岡さんが挨拶に立ち、選手に向かって、「ひとつ、大きな競技を目前にして、風邪などを引かないように注意してほしい。ふたつ、自分に自信を持って競技をしてほしい。3つ、良い結果は、苦勞しないと生まれません。自信は練習、努力の結果得られます」と選手らに今後の奮

闘を促すとともに、「強くする会もなお一層支援に力を入れることをお約束します」と選手たちに熱いメッセージを送った。

★ ☆ ★ ☆

最後に学生記者取材班は、久野理事長に2日間の総括と今後の支援態勢について伺った。

「浦田監督は、冷静な科学的な分析力がある。育てる力もある。間違いない科学的に強い体をつくれる。科学的育成には時間がかかるが、そのために今回はいい最初の一步だった」と今後への期待を口にされた。加えて「箱根駅伝は伝統的スポーツであるから、強いチームをつくるために支援をしていきたい」と。久野理事長もすこぶる「熱い応援者」であった。

学生記者取材班

山崎綾香（今春、法学部卒業）／上田雄太（文学部4年）／武田朋実（法学部4年）／篠田有紀（法学部3年）

Ⅱ以上「強くする会」バス同乗
野村茉莉亜（商学部3年）Ⅱ2日横浜／石川可南子（法学部2年）Ⅱ2日大手町／橋本あずさ（法学部2年）Ⅱ2日平塚